

自然農法思想

—福岡正信の場合—*

Philosophy of Nature Farming: The case of Masanobu Fukuoka

木村 武史
KIMURA Takeshi

Abstract

In this paper, I explore the philosophical thoughts of Masanobu Fukuoka, a worldly well-known nature farmer. In the first part, I examine his religious experience, which became the philosophical and practical base of his later nature farming. In the second, I examine the meaning of the word "nature" in Fukuoka's usage since the word "nature" is the central idea in his nature farming. His idea of nature is closer to Platonic sense of perfect nature, which functioned in his vision

* 本論は2011年7月2日に逝去したオックスフォード大学のピーター・クラーク教授を追悼する意味で書くと思う。平成19年度筑波大学戦略イニシアティブ推進機構プレ戦略研究プロジェクト「自然科学を含む人文・社会科学を基盤としたサステナビリティ・スタディーズ構築のための国際学融合的研究」（拠点代表木村武史）の一環としてクラーク教授を筑波大学に招聘したのは2008年の秋ことであった。筑波大学で学生向けの講義を二度ほどしてもらい、つくばから一緒に熱海の世界救世教の本部を訪問した。その次の年には、クラーク氏の薦めもあり8月に2週間にわたってブラジル、サンパウロ市にある世界救世教の神学校 Faculdade Messianica で講義を行うとともに、現地の自然農法の農場や関係の店などを訪問した。サンパウロのホテルで毎朝、毎晩、日本の新宗教や世界救世教について話し合い、様々な刺激を受けた。その後、筆者は熱海の世界救世教を改めて訪問し、岡田茂吉と自然農法の詳細な関係について調べるとともに、世界救世教に関係する財団法人自然農法国際研究開発センター及び千葉農場において自然農法について調査した。それらの調査を基にして、2010年12月にはオーストラリア、パースで開催された「国際宗教・自然・文化・社会学会」の第四回大会で日本の自然農法とその思想について Voices from Edge: Religions and Sustainability というタイトルで発表した。その後、2011年7月に国際宗教社会学会（ISSR）にて、クラーク教授、Faculdade Messianica の Andrea Tomita 教授とともにセッションを企画したが、残念なことにクラーク教授はISSRが始まる前日に急逝してしまった。このように筆者のサステナビリティ研究において自然農法というテーマが加わったのは、紛れもなくクラーク教授との交流から生まれたものである。本論では、当初、岡田茂吉の自然農法と福岡正信の自然農法の相違について焦点を当てようと思ったが、字数の制約から福岡だけに絞ることにした。岡田茂吉の自然農法については別の機会に論ずることにしたい。また、査読委員からは貴重な助言を頂いた。この場を借りて謝意を表したい。

as the source of his practical experimentation in nature farming. In the third, I examine Fukuoka's criticism of modern agriculture and modern society.

1. 始めに

世界の総人口が70億人を突破した2011年。2009年に既に世界の総人口の半数以上が都市生活者となったように、第一次産業の従事者の方が少なくなりました。つまり、世界の大多数は食物生産に関わることなく、消費する立場になったということである。そして、世界の総人口の約一割の7億人近くが飢餓状態にあり、¹世界の農業生産高はここ数年横ばいを辿っている。今後急激に増加する見込みはないという。

世界の人口増加率が急速であった1960年代、緑の革命によって多くの餓死者を出すことを防止することができた。現代農業技術は化石燃料に由来する化学肥料を多用し、それによって成長、生産増加を可能とする品種を作り出したのである。米や麦など「植物」に焦点を当て、それを改良することによって問題を解決しようと試みてきた。そして、1960年代・70年代の世界人口急増の時代には成功を収め、N・ボーローグがノーベル平和賞を受賞することとなった。(レナード 1975) だが、その後、予想だにしていなかった問題も出てきた。インドのヴァンダナ・シヴァなどが指摘しているように(シヴァ 1997)、伝統的な土地固有の稲種が追いやられたり、肥料を大量に用いたため土壌の劣化という問題が起きたのである。化学肥料を多用することにより土壌が硬くなり、砂漠化し、農産物の作付けに適さなくなってしまったのである。

また、農業技術の発展により、遺伝子工学を用いて害虫・病気に強い種が作られたが、それは特許を持つ会社が推し進める単一作物栽培を広めることになり、様々な弊害が報告されている。FAOなどによると、世界の農業生産物の増加が滞るようになり、新たな農学技術によって生産力を改良しようとする自然科学的立場は継続しているが、現時点では緑の革命と同等の農業技術革命は期待できないようだ。遺伝子組み換え作物による生産率の増加が期待されているが、それも限界に突き当たっているようだ。そして、農地の砂漠化は世界的に深刻化しており、森林伐採による砂漠化とともに、農耕栽培に適さない土地が世界の各地で少しずつ増加している。気候変動の影響によって今後どのように農地の砂漠化が進行するのか、注意を払わなくてはならない問題となっている。

このように近代農業技術に基づく農業にバラ色の未来を夢見ることができなくなってしまっ

1 飢餓の原因は様々である。単に農業生産量が足りないということだけではなく、東アフリカにおける内線や旱魃などの要因もある。また、農作物の価格が投機の対象になっているということも関連している。2011年の国連世界食糧計画(World Food Programme)の報告によれば、世界の7人に1人の割合の約9億2,500万人が飢餓に苦しんでいる。地域別では以下の通り。アジア・太平洋地域 5億7,800万人、サハラ砂漠以南のアフリカ 2億3,900万人、中南米 5,300万人、中東・北アフリカ 3,700万人。国連世界食糧計画ホームページ(<http://www.wfp.or.jp/kyokai/hunger.html>)、2011年11月16日アクセス。

いる時、近代農業技術ではない農業を行う動きも現れてきている。オーストラリアのビル・モリスンが始めたパーマカルチャーなどは日本国内でも良く知られた事例であろう。（モリスン 1993）そして、1980年代初めに欧米、ラテンアメリカ等における有機農法、自然農法の実情を視察した米来によれば、自然農法の実験や研究がもっとも進んでいるのはヨーロッパとアメリカであり、各種の研究機関はもちろん、政府機関も動いていた（来米 1984）。日本では、自然農法に取り組む個人や活動家はいたが、政府や研究機関はほとんど自然農法を支援していなかった。

「有機農業の推進に関する法律」が制定されたのは、2006年のことである。日本の政策レベルでの動きは遅いかのように思われるが、このような自然の力だけに頼る農業の先駆者は実は日本の国内に見出すことができる。それが自然農法の岡田茂吉と福岡正信である。²

岡田茂吉は世界救世教の教祖であり、今日、多くの自然農法関連の書物には、自然農法の創始者として岡田の名が挙げられている。他方、福岡正信の自然農法は、岡田とは異なり、何ら制度化することがなかったのも、そのまま継承されたということではなかったが、その著作を通して、多くの人に影響を与えてきた。しかし良く見てみると、福岡に触発された人々も福岡と全く同じ仕方で自然農法を行っているわけではない。岩澤信夫、川口由一などが福岡の自然農法に触発されたと述べているが、彼らの自然農法は彼ら独自の試みによって展開している。岡田と福岡の自然農法がそれぞれどのような形で継承、展開されてきているかを調べることも非常に興味深い課題ではある。（藤井 1983）そして、今日、日本各地で様々な自然農法が実践されているが、それらの流れを辿っていくと岡田と福岡に辿り着くことができるのは確かである（来米 1983:8-9）。

ここで気をつけなくてはならないのは、両者は同じく自然農法という言葉を使ってもその思想内容と実践内容は異なっているという点である。両者を比較して検討すると興味深い論点が見えてくると思われるが、本論では紙面の都合もあり、主に福岡に焦点を当て、その思想的意義について検討を加えることとする。最初に、福岡の簡単な紹介とともに、福岡の宗教経験とも呼べる彼の「一生を狂わした経験」を取り上げてみたい。そして、次に、福岡の自然農法における「自然」という言葉の意味を検討する。最後に、福岡が展開した現代文明批判と現代農業批判の一部を取り上げ、なぜ、福岡が社会の片隅で自然農法を実現しようとしていたのか、その意味について考察を加えることとしたい。

2 岡田に関していえば、より正確にいうならば、岡田が一時期入信していた大本教において出口ナヲ（王仁三郎）が「大本理想農園」で農業を行っていたことから、信仰と農業を結び付ける立場（信農一如）の起源は大本にまで遡るということもできる。しかし、農家出身の出口ナヲの農業が今日いう意味での自然農法であったかは検討の余地がある。この問題は今後の課題とする。また、世界救世教関係の財団法人自然農法国際開発研究センターは有機認証業務に携わっていることから、「有機農法」と「自然農法」には違いがあるにもかかわらず、有機農法という用語も現在では用いている。それは必ずしも両者を混同しているからではなく、認証事業に関連してのことである。それゆえ、岡田の自然農法の考察においては今日いう有機農法を批判するところがあるが、それは今日の有機認証事業とは無関係であることを予め述べておきたい。

II. 福岡正信（1913～2008）

福岡正信は、世界救世教の教祖岡田茂吉と並んで、自然農法の創始者の一人として挙げられることが多い。だが、世界救世教の教祖であった岡田茂吉の自然農法とは意味合いが随分と異なる。教団の教祖であった岡田にとっての自然農法は世界救世教の三つの主要な教えの一つという位置づけであった。それに対して、福岡は一介の農夫であった。農夫に始まり、農夫に終わる、というのが福岡の人生であった。福岡にとっての自然農法は福岡その人そのものと言っても過言ではない。福岡は自然農法一筋に生きたといえる。

今日では、福岡は自然農法の大成者として知られているが、その人生を見てみれば、必ずしも順調であったとはいえない。試行錯誤の末に辿り着いたのが、今日、我々が見知っている福岡の自然農法である。預言者は故郷には受け入れられぬという格言を地でいったかのように、福岡の名声は海外の方が高く、³日本国内においては、その著作が一筋縄ではいかぬ書かれ方をしているせいか、それほどでもない。福岡の自然農法に感化されて、自然農法を試みている人たちはかなりいると思われるが、必ずしも福岡の方法・考えをそのまま踏襲しているわけではない。それぞれの農風、それぞれの土地に適した自然農法、自らの考えを吟味しながら独自の展開を試みている。

福岡が逝去してしまった今、福岡の自然農法に関わる思想を何を用いて考察できるかは吟味なくてはならない。福岡の自然農法の農地をそのまま見て考えることができない以上、残された著作や講演の記録、あるいは映像資料などを用いなくてはならない。ただし、福岡の用語には独自の用い方も散見されるので、十分に気を付ける必要がある。たとえば、福岡がまだ若かりし頃、それまでの行いが無意味だと突然知った経験を繰り返し説明しようとしている。それをある種の宗教経験と呼ぶことは可能である。だが、それは「神」や「仏」など宗教的実在を経験したという意味ではなく、人間の行いは無意味であるということである。それを説明しようとする福岡の言葉はしばしば仏教的なニュアンスをもった言葉遣いをしたり、一般知識人としての老荘思想の受容と受け止められる言葉遣いをしたりすることがある。また、イエス・キリストの言葉にも頻繁に言及する。ある意味では20世紀半ばに日本で広く受け入れられた永遠の哲学の一類型を示しているともいえる。いかなる宗教もその目指す頂上は同じであるという考えである。それゆえ、福岡の仏教理解、キリスト教理解もその枠組みでなされたものであり、良く知らないで福岡の言葉を読むと若干困惑を感じることもある。

3 福岡の『わら一本の革命』が英訳されたことだけではなく、1970年代に入って広まった反科学主義の風潮も関係していたのではと思われる。その傾向は日本を含めた西洋社会においても見られる。廣重徹は次のように書いています。「1970年代にはいって、反科学主義は一種の知的モードとなりつつある。近代的そして西欧的な合理性の偏狭さをあげつらい、科学を見限り、伝統的・土俗的な精神風土に救いを期待する言説は、もはや珍しいものでなくなった。しかも、科学と合理性への幻滅と反発の広がりには、けっして日本だけの現象ではない。」（廣重 2008:17）。

また、福岡は自然農法の優位性を説きながら、近代科学と近代哲学を批判し、近代農業をも批判するという具合に、自然農法と近代科学、近代哲学、近代農業を理解していないと分かりづらい書き方をしている。近代哲学に関する知識をどのように手に入れたかは不明であるが、強い憤りを感じていることが分かる。また、自然農法が成功し、福岡の社会的評価が確立して以降に書かれた文明批評とでも呼べる一連の思想も、福岡の経験を経て、徐々に形成されてきたものであり、ある程度、社会から期待されている文明論的批評を展開しようと試みているのではと思われる部分も見られる。そのような思想形成の過程についても考察を加えなくてはならないが、ここでは取り上げないことにする。

福岡が自然農法に至る経緯を見てみると、幾つかの興味深い点がある。まず、福岡が何度か述べている若かりし頃の「人生を狂わした」経験である。その経験によって福岡は人間の営みの無意味なることを自覚した。そして、地元愛媛県に帰り、しばらく高知県で農業試験官をしながら、自然農法についての観察力を身につけた。やがて独立した農家となった後もなんども試行錯誤を繰り返すことによって、30年後に福岡の自然農法と呼ばれるものに到達した。それは人生を掛けた試行錯誤であったと言える。重要な点は、その試行錯誤の過程で上手くいかなければ通常の慣行農業に戻るということがいくらでも出来たのに、それを行わなかったという事実である。おそらく福岡の実験が失敗していたとしても誰も責めはしなかったであろう。ただ歴史の彼方に忘却されただけのことである。だが、福岡の場合は、人為は無意味であるという経験、自然は「神」であるという経験が出発点にあり、それを実現する手段として自然農法というのが編み出されていったという経緯がある。福岡の自然農法におけるこの土台を見過ぐすと、その自然農法を単なる技法と捉える過ちを犯すことになってしまう。それはまた福岡自身が繰り返していた点でもある。

Ⅲ. 福岡の「一生を狂わしてしまった一事」の経験

さて、福岡の自然農法を考えるに当たって重要なのは、福岡が繰り返し述べている福岡の「一生を狂わしてしまった一事」の経験である。長い間、口外することはなかったというその経験は、「書くくらいむだなことはないが、といってこのときの一瞬ほど私を変えてしまったものもない。」(福岡 2009a:282)この経験を説明するために、福岡は最初、『百姓夜話』という書を著した。その書の再版(1958)では、福岡の一生を狂わしてしまった一事を書こうとするのは不可能であるが、とも述べている。⁴『百姓夜話』はある老人と私の対話からなっている対話篇である。福岡の思想を対話の形式で表わそうとした著作といえる。そして、そのような対話篇を生み

4 「若いとき私は、ある一事を知った。それから……漠然とした十年がすぎ、さらに何をするともなく、怠惰な二十年、三十年と時がたった。(中略) この書は平凡な一百姓の人生報告ではない。私を支配して、私の一生を狂わしてしまった一事が何であったかを書こうとしたにすぎない。不可能と知りながら……」(福岡 2010:vi)。

出したのが、福岡の「一生を狂わしてしまった一事」の経験である。更に、福岡の自然農法は、福岡の観点からすれば、その「一生を狂わしてしまった一事」を実証するために思考錯誤の果てに編みだされたものであり、最初から「自然農法」という技術を目指して開発されたものではない。それゆえ、福岡のこの経験と自然農法の関係も十分に考察しなくてはならないし、おそらく福岡の自然農法の意義はこの「一事」を理解することなくしては十分に理解することはできないであろう。単なる農業技術として福岡の「自然農法」を見ようとするのは、福岡の立場の「本質」を見ることなく、その外的な現れだけを見ようとするに等しい。⁵ では、その経緯を見てみよう。

それは福岡が25歳の春の出来事であった。当時、福岡は横浜税関植物検査課に勤めていた。主な仕事は船が入港すると船内で植物の検査をすることと、研究室で植物病理の研究をすることであった。⁶ その時の研究課題は、当時、柑橘類の樹脂病菌が米国で二種類、日本で一種類報告されていたが、それらが異種類のものであるかどうかを判定することであった。これらの菌の属種の決定はミカン類の輸出入禁止の処置を取る上からも必要な研究であった。これらの菌は形態や生態の上から見ると全く異種にも見えるが、両者の中には近縁のものがあると確信し、各方面から採集した菌を培養し、ペトリ皿の中で交配を繰り返し、その結果を顕微鏡で観察していた。特殊培養基上で二種の菌が接合し、一年後には一つの子実体（完全孢子）ができた。この子実体は百分の一ミリくらいの大きさでその孢子の袋の中にさらに八個の微粒の孢子が含まれていた。福岡は顕微鏡の下で、この子実体の袋を引き裂き、中から八個の孢子を別々に取り出して培養し、再び交配してみるという仕事をしていて、手元での微粒子を取り扱う作業であったので、少しでも呼吸が乱れると孢子はどこかへ飛んでいってしまうという忍耐のいる仕事であった。

ところが、そのような仕事に従事しているとき、福岡は急性肺炎にかかってしまい、入院することとなった。当時の肺炎の治療法は大気療法といい、屋上の隔離室に一人で入れられることになった。その部屋は周囲の窓が全部取り払われ、寒風が吹きすさび、雪なども容赦なく舞い込む部屋であった。そのような部屋に入れられ、福岡は次のように感じた。

「私はまったく独りぼちにされた。私は今まで平和な家庭に生まれ、学校を出てからも当分好きなことをやっておればよい身分であった。あまりにも順調であり、特に横浜時代は青春を

5 『百姓夜話』は昭和43年に『無』と題され、再版された。『無』三部作(新版)のしおりに次のように書かれている。「私は終戦後まもない頃に『無』と題した謄写本を出した。それを昭和三十三年に『百姓夜話』と改題して出版した。私はこの一書にすべてを書きつくしたつもりで、二度とペンをとるつもりはなかった。だが十年たって後に、読者の不満から『百姓夜話』を哲学的に解説した『無』をさらに自然農法を主体にした実践編として『緑の哲学』を出版するはめになった。もちろんいずれも特異な内容のため、自費出版の限定版で、世間の片すみではそばそと読まれたに過ぎなかった。ところが時代は変わったのか、忘れかけたこの頃になって、この『夜話』『無』の再版を要望する声が多くなった。」(福岡 2010:vii)。

6 福岡が最初に自然科学系の研究者であったことは重要である。つまり、後に自然科学の批判を展開していくが、自然科学のことを知らずに自然科学の批判を展開しているのではない、ということである。

謳歌してあまりがあった。突然屋上の隔離室に放り込まれて、私は戦慄した。『死ぬのではないか。』私は反動的な恐怖と苦悩を味わわねばならなかった。面会は謝絶された。」(福岡 2009a:282)

福岡はこのような状況におかれ、今まで生きてきて当然の如く受け入れていた価値観を根本から疑うようになった。

「私は今まで何を頼りに、何を目ざして生きてきたのか。私の親や姉妹は本当に頼れるのか。私は学問に生きるつもりでいた。研究、それは未知の世界の開拓で、学者の世界は、最も純粋な美しい世界と信じてきた。菌の固定をする。新しい学名の終わりに、私の名前がいつまでも残る。学問の世界の名誉は純粋な喜びであるが、一步裏返してみると、醜悪な売名のみが残るのではないか。もし学術雑誌に研究者の名前が載らなかったら、それでも未知の世界の探求に学者は没頭し、面白いと言うであろうか。科学的興味、それは偽善ではなかったか。・・・今ここで私がころりと死んだら、両親や兄弟、友達の幾人が泣くだろうか。しかし、その涙は誰がために流す涙と言えるだろうか。失われた者を惜しむ心。それは涙を流す者のためではないのか。私が願ったもの、確信したもの、それがもろくも崩れ去るような不安に襲われたのであった。」(福岡 2009a:284-285)

しばらくして福岡は病気から回復し、仕事に復帰した。しかし、以前とは異なり一切のことに懐疑の目を向けるようになっていた。果てしない懐疑のため、仕事に身が入らず、半ば茫然とした日々を送っていた。そのような中、ある夜、福岡は一晩中、街の中を歩き回っていた。気付くと、山手の断崖の上に立っていた。苦悩の限界に達したかのように感じ、精根尽き果てた感じがしたので、太い樹木の根元に横たわっていた。5月16日の春の明け方であったという。

「いつの間にか、夜が白々と明けはじめていた。薄靄が一枚一枚と紙をはぐように薄れていった。潮風が一陣さっと吹き上げた。断崖の一角が、ふっと姿を現した。その瞬間五位鷺が鋭い声を発して飛び去った。その時である。私の頭にまさに青天の霹靂のようにひらめいたものがあつた。それは一瞬の出来事であり、朝靄が吹き払われるように頭の中を吹き抜けていった。『ない』『何もなかった』『何もないではないか』何を苦勞しているのだ。この世には何もないではないか。『おお、今私はないを知ったのだ』と、私は断崖の上で驚愕と歓喜の叫びをあげた。『ない』・・・・『ない。何もなかった。アハハハ』・・・・私は高笑して立ち上がった。ないとはこんなことだったのか・・・・。』(福岡 2009a:285-286)

翌日、福岡は辞職願を提出した。上司や友人たちは福岡の変わり様に驚き、心配した。福岡は友人の勧めもあり、しばらく静養したが、福岡は自身と世間の間に大きな隔たりが出来てしまっているのに気付いていた。福岡の見舞いに來た友人に厳しい言葉を投げかけたりしたので、友人

は次第に離れて行ってしまった(福岡 2009a:289)。一年ほどして福岡は旅に出て、出身地の田舎に帰った。ところが、福岡の奇矯な言動は両親を苦しめるばかりであった。当時は戦中で、日本軍による中国侵攻などで世間は騒がしくなっていたが、父親の勧めもあり高知県農業試験場に勤めるようになった。農業試験場においては科学的な食糧増産運動に励んでいたが、漠然と自然農法の追求に心を向けていた。そのような中、自然農法のヒントが偶然のことから得られた。それは自然の「種を播かない播種」であった。海岸の松原の中で、稲の脱穀をした跡があり、そこにこぼれた籾から発芽した多数の稚苗を目にした。この自然生えの稲が越年栽培の糸口になっていった(福岡 2009a:253)。やがて戦争が激しくなり、福岡にも召集が来た。そして、戦後となり、福岡は百姓となった。

「私は私の過去を忘れたが、せめて、かつての私の確信が本当であった証拠を、実践の上で現わしてみたらと思うようにもなった。何もない、科学技術の無用であることを、百姓の具体的な仕事の上で実証してみる。それが、私の把握した真理の実証になる。」(福岡 2009a:290)

こうして、福岡の自然農法の実験が始まることとなった。

さて、福岡自身の筆による福岡の「一生を狂わせることとなった一事」の経験を見てみた。それを経験した直後に書かれたものではなく、十数年の思索と自然農法の実践を経た上での記述であるので、文面をそのまま受け取ることはできないが、福岡正信という一人の人間の人生を大きく変えた経験があったということは、経験的な事実として理解する必要がある。その経験を直接表わした「ない。何もない。」という心の叫びは、その時に発せられたと見なしてもそれほど誤りではないだろう。

ここで興味深い点が幾つかある。第一に、福岡自身が述べているように、福岡が自然農法の思考錯誤を邁進し続けた原体験であり、そこに偽りはない。それは福岡自身がその経験によって悟ったと理解した経験であり、そのこと自身の真正性に疑問の挟む余地はないであろう。その経験をするに至る過程の構造を見てみよう。福岡が「病氣」を通して、それまでの自分自身の人生の価値観に疑問を抱き、悩み、日常性の昼の時間・空間から離れ、疎外されていたということ、そして、悩み、夜中に一人孤独に歩き回り、疲労困憊した後、まさに夜が明けようとしているその時、五位鷺が鋭い声を発して飛び去ったその瞬間に青天の霹靂のように閃いた。このような日常性の構造からの乖離と周縁における経験が持つ価値の転換という目覚めは、宗教現象にしばしば見られる。このように説明される過程は、病氣は抜きにしても、禅僧の修行と悟りの経験の訪れという過程に非常に類似する。また、ウィリアム・ジェームズに従えば、二度生まれの経験と言っても良いかもしれない(James 1912)。ここで福岡の経験の質を考察するにあたって、ウェイン・ブルードフなどの社会構築主義に倣って、福岡が禅についての語りをそれ以前に知る機会があり、その認識論的な枠組みがあったからこそ福岡はそのような経験をすることができたという解釈をする必要は特にないだろう。ある意味ではそれは当然である。福岡は日本の文化社会において育っていたからである。むしろ、福岡が自然科学者であったということ、この経験を通し

て自然科学の価値が反転してしまったこと、そして、その福岡の経験は福岡自身が気づいていたかは別として、極めて日本の宗教的文化に根付いたものであったという点が重要である。

そして、第二に、福岡がこの経験で得たことを『無』三部作が再版されるに当たって、次のようにも説明している。おそらく最初の「一事」から五十年以上経ってからの言葉であろうが、福岡が自分が書いたことは何であると考えていたかをよく示しているといえる。

「この書がどんなに粗雑で、愚劣であったとしても、これが彼岸と此岸を結ぶ一本の丸木橋であるという私の確信はゆるがない。なぜならば愚者の私と神の共著であるからである。貴方が信じてこの橋を渡ってゆけば、やがて彼岸の神と対面できるはずである。ただ残念ながらこの丸木橋は現在極めて粗末である。でも人々がこの丸木橋のどこが悪いのか、不完全なところを指摘してさくれば、どのようにも補足することができる。この丸太の橋は、あなたと神との協力によってのみ完成される。」(福岡 2009a:viii-ix)

福岡が長い年月を掛けて思索を深めて行った時に、このような自己理解が生まれて来たといえる。つまり、試行錯誤を繰り返し、改良を重ねてきた自然農法が福岡自身に明らかにした思想世界は、今や福岡にとっては「此岸」と「彼岸」を結ぶ架け橋であったことが明らかになったのである。そして、重要なのは単に「此岸」と「彼岸」を結ぶだけではなく、彼岸にいる神にまみえることができるというのである。ここで福岡が「神」という宗教的実在を示すために用いられる言葉を用いているのは興味深い。そして、自然農法は人々がその神と対面できるように助ける役割を果たしているとは自覚しているといえる。だが、気をつけなくてはならない点がある。福岡は「神」という言葉を用いているが、その「神」は神道的な神でもないし、キリスト教的な神でもない。それは端的にいえば、自然そのものである。その自然は、ある意味では、福岡の自然農法を通して明らかにされる自然であり、通常の意味での自然とは異なっている。福岡が意味する自然については後ほど詳しく見ていくことにする

それゆえ、福岡が辿りついた自然農法は、福岡自身の見地からすれば、宗教的営みであったといえる。

「百姓が、畦をぬり、泥にまみれて、田植えをする、その姿を、単に非科学的な労働としかみない近代人の視野から脱皮して、それを芸術的、宗教的工作として把握するのが、自然農法の使命でもある。」(福岡 1976:197)

福岡の自然農法についての説明を読むと、単に自然農法の「農法」が分かるだけでは十分ではない、その基盤にある「無」の思想が理解され、広まらなくてはならない、と繰り返し説いているのに出会う。そして、その「無」に立脚して福岡は近代農業批判、西洋哲学批判、近代文明批判を展開していくことになる。

宗教学の見地から興味深いのは、福岡の自然農法の出発点に「一生を狂わした一事」の経験が

あり、その経験で得た内容を実証するために始めた自然農法が実際に効果を証明することができたということである。そして、福岡は更に自身の原体験ともいえる「無」の経験をより深く確信し、思索を深めていった、という思索の展開が見られる。⁷福岡が「無」の経験から語る言葉は英語を通して海外の若者に受け入れられた。また、農業研究者の間でも一部高く評価されることとなった。そして、自然農法という実践的行為そのものが証拠として人々の前に提示された時、自然農法だけではなく、それを生み出した「無」の体験、そしてそこから導きだされる「無」の教えの真実性が同時に受け入れられることの必要性を福岡は強調している。何もないということは人間の行いには価値がないということである。自然そのものに価値があるのだということを福岡の自然農法が実践的に証明したといえる。

では、次にその自然農法における「自然」について考察を加えてみることにしよう。

IV. 福岡の自然農法の「自然」

さて、福岡の自然農法について考える時、この「自然」という語が最も核心となる言葉であることは確かである。しかし、その自然農法を理解しようとする時に、もっとも厄介なのが、この自然という言葉でもある。というのも、福岡の言葉使いの中で最も不可解なものこの「自然」という言葉であると言ってもよい。というのも、福岡独特の宗教的意味合いも含まれているからである。例えば、福岡が自然は神であるという時、通常、我々が考えている民衆神道的な意味合いかと思ってしまうが、そうではない。同時に、近代社会に工業的農業をも批判するので、近代以前の農業を念頭においているのかと思うが、近代農業が導入される以前の農業は必ずしも福岡が意味する「自然」農法ではない。福岡が考える「自然」農法とは近代以前の農業のことを指し示すのではない。例えば、アフリカ、カラハリ砂漠のブッシュマンの農耕生活は単なる「原始農業」であって「自然農法ではない」という。しかも、自然農法は現在広まりつつある有機農法でもないし、過去の農法でもない。「過去も未来もない、それを超越した、それこそ三千年の昔から、お釈迦さまのときから、ガンジーのときからあった農法だと思っています。ただ、具体的な形に現れなかった農法に過ぎない。」（福岡 1984:303）既に見たように福岡は自然農法を「宗教的」な事柄と見なしていたのであり、それゆえその説明もこのような表現を取ることになる。宗教学的にはそれほど違和感を覚える言説ではないが、農業についての説明かと思って聞くと、分からなくなるであろう。

さて、福岡の自然農法の具体的な様相について見てみることにしよう。ここに至るまでは長い年月に渡る福岡の思考錯誤があった。その過程については別の機会に触れることにするが、最終

7 福岡の周りには緩やかなコミュニティが形成されたが、それは福岡の教えを中心とした制度的コミュニティへと展開しなかった。その意味で、福岡は預言者的な役割を果たしていたと言っても良いかもしれない。だが、福岡にとっては、自然農法がコミュニティを作り上げる土台であったので、その自然農法が継承されるということ、そして、福岡の自然農法の背後にある思想も受け入れられるということが重要であった。

的に辿り着いた自然農法についての福岡の説明は完結で短い。

「自然農法の作り方は、きわめて簡単明瞭である。秋稲刈り前に、稲の穂波の頭から、クローバーの種と麦種をばら播いておく。数センチに伸びた麦を踏みながら稲刈りをする。三日ほど地干しにしてから脱穀。そこで出来た稲藁全部を、長いままで田圃一面にふりまいておいて、鶏糞でもあれば、その上にふりまいておく。次に稲の種籾を土団子にして、正月までに、ふりまいた藁の上にばら播いておけばよい。これで麦作りも籾播きも万事終わりで、麦刈りまで何もしない。作るだけなら10アール当たり一〜二人の労力で十分である。

五月の二十日ごろ、麦を刈るときには、足下にクローバーが茂り、その中で土団子から籾が数センチの芽を出している。麦刈りをして、地干し脱穀がすんだら、出来た麦藁を全量長いままで、田圃一面にふりまく。田の畔ぬりをして四〜五日水をためると、クローバーが衰弱して稲苗が土に出る。あとは六〜七月のあいだ無灌水で放任し、八月になってから十日か一週間ごとに排水溝に一回走り水をするだけでもよい。

以上で、米麦作のクローバー草生、米麦混播、連続不耕起直播という自然農法の概要は説明したことになる。」（福岡 2009b:5）

福岡の自然農法は人間の役割を徹底的に排除することでも成り立つので、もし、人間の行動を中心に自然農法のサイクルを説明しようとするれば、このように簡潔なものとなる。ここで幾つか注意点が必要である。まず、稲作を見てみよう。

ここでははっきりしないが、福岡の稲作は水稻ではなく、陸稻であるという点をまず指摘しておく必要がある。日本では稲作は水田で作るというイメージが強く固定されているが、稲作の歴史を振り返ってみれば、陸稻が最初で、水稻は後に成立したといわれる。福岡も最初は日本の農業の主流である水稻で自然農法で実験したようであるが、最終的には陸稻を選択した。水田稲作には人間の労力が必要不可欠であり、福岡が体得した「なにもない」という哲学とは相容れないという面もあったのかも知れない。

自然農法のサイクルがもう少し分かるように、福岡が自然農法の四大原則と呼ぶ「無耕耘（不耕起）」、「無肥料」、「無除草」、「無農薬」について見てみよう（福岡 2009b:144-175）。何もなさない。それが福岡の思想の核心である。それゆえ、土を耕さない。特に田畑を耕すことは重労働であり、農作業の主要部分を占めている。それゆえ、自然農法だから土を耕さない、と。このように説明されれば、思想としては納得がいくかもしれないが、農法としてはそれだけでは十分ではない。

まず、耕すことの是非について福岡がどう述べているか見てみよう。

通常、作物の根は水と空気と栄養分を求めて深く地中に入っていくと考え、水と空気と栄養分をより多く補給することが作物の生育を助けることになるかと確信している。鋤鉋で土を耕すことによって、土は膨柔になり、空気はよく入り硝化作用が盛んになって有効性の窒素が多くなり、施した肥料も作物によく吸収されるようになる。これが土を耕す際に考えられていることであ

る。

ところが、福岡は反対のことをいう。土を耕すと土は逆に固くしまり通気も悪くなる。田を鋤ですき、畑を鍬で打つとき、一時的には土壌には空間ができ、土は柔らかくなったように見えるが、粘土を練のと同様、鍬で土を耕せば耕すほど土の粒子は小さくなり、土は固くしまってしまう。福岡によれば、土は、人間が耕さなくても、自ら生き、自ら耕す。人間は何ら手を施す必要がない。

次に、無肥料について見てみよう。

まず、福岡は肥料の効用が高らかに宣伝される農業試験場での検証方法の問題点を指摘する。試験場では、ポットに土を入れて試験するが、不自然なポットの中では土壌微生物などはほとんど死滅してしまう。そのような条件下で肥料を与えることにより作物の生長が僅か促進されたということで肥料の効果が過大に評価され、宣伝されてきた。不自然な実験室の「試験成績」が自然の条件下にそのまま当てはまると考えるところに既に間違いがある。更に、施肥の害があるが、それはほとんど指摘されていない。その害を福岡は五点挙げている。1) 施肥による作物の弱化。2) 弱体化された食物に障害が起き、病虫害への抵抗性が低下する。3) 土壌中に施した肥料は、実際の場合には実験室での効果ほどない。4) 三大肥料の硫安、過燐酸、硫酸カリの成分の約70パーセント以上が濃硫酸であり、土壌を酸性にするだけでなく、土壌中の微生物を抑圧する、あるいは死滅させる。5) 化学肥料を用いるため、土中の微生物が死に、限定させられた栄養成分のみで作物が作られるようになる。そのため、作物が要求する数多くの微量元素が欠乏し始めてしまっている。このように肥料の害悪を五点挙げているが、ここで明確にしておくべきことは、福岡が肥料は必要ないと言っているのは化学肥料は必要ないと言っているので、有機肥料も必要ないということではない。これらの施肥の害悪の背後には、福岡が考える土はそれ自身で既に十分栄養素があり、作物も十分に土だけで生育できるという考えがあることは説明するまでもないであろう。

では、次に第三点目の無除草について見てみよう。

まず、福岡はしばしば批判する分別知を用いながら、「作物」と「雑草」の区別の是非について取り上げる。地中において各種各様の微生物が相競合し、相共棲し共存しているように、地上においても各種各様の草木が共存、共栄しているのが自然である。人間が自然の姿を直視し、その力を信頼することができたならば、様々な種類の植物を共存共栄のままで作物を育てたのではないだろうか。人間が人間の目（分別知）をもって植物を見、作物と雑草を区別し考えたときから、人間の力で作物を育てようとするに至った。そして、その作物を育てるために肥料をやるという立場からすると、その作物の周囲の雑草は肥料を横取りする悪しき草となる。それゆえ、その悪しき雑草を取り除かなくてはならなくなる。

しかし、作物は肥料によらなくても生長するという自然農法の立場からすると、作物の周囲にある雑草は邪魔ではない。むしろ、なぜ、雑草が生えるのかを考えることによって、雑草の有用性が見えてくる。雑草の根が深く地中に入ることによって、土が膨軟になる。雑草が枯れ、死ぬと腐植が増し、微生物が繁殖し、土は肥沃化する。そのような土塊では、雨水は地中に浸透し、

空気は深く送り込まれ、ミミズが棲むようになり、モグラも出てくる。土が有機的な活動体になるには雑草は絶対必要なものである。福岡は、ここで指摘はしていないが、土は実はミミズが作り出してきたのである（モントゴメリー 2010:10-15）。

それゆえ、雑草を除く必要はない。むしろ、雑草を活かし、雑草の持つ力を活用することこそ百姓がとるべき道である。無除草とは、別の言い方をすれば、雑草有用論である。

よく自然の姿を観察すると、巨大な樹木が茂るその下には、灌木が生長し、その灌木の下には雑草が、またその雑草の下にはコケが生えている。そこには共存共栄が見られる。雑草によって、灌木の生長が抑えられ、灌木によって巨木の生長が圧迫されたと見るよりも、このような混生状態においても各々の植物が生長を計りうるのかが不思議であるという。そして、このような「自然」についての観察から、米麦作においても除草無用論はなりたつ。だが、稲や麦の中に雑草が生えると収穫作業に差し支えるので、雑草を他の草に置き換える。福岡は他の草が育たないようにし、肥料の基となるクローバーの種をまく。あるいは別の方法として麦のある間に、その中に種籾と緑肥を播くという連続方法もある。より自然を生かした米麦作を無除草栽培で試みている。そして、それは、

「自然の姿にもっとも近い方法で栽培することによって、稲や麦の真の姿を把握し、さらに強大な生育と収穫を目指しての精進なのである。」（福岡 2009b:167）

さて、最後に無農薬についてであるが、福岡の考え方が分かれば、それほど難しくはない。本来、病虫害はあるのかないのかという出発点から検討すると、自然の草木には四百四病があり、実害はないが、病気や虫による害を重視するのは農作物だけである。

ここで一旦、福岡がいうところの「自然」が一体何を意味しているのかについてまとめてみたい。

非常に興味深い点だが、もし、福岡が語った言葉をそのまま受け取るならば、福岡が自然農法の際に念頭に置いていた「自然」は、プラトンのようなアイデアに近いと考えられる。一方で、自然を語る時には生態学的なニュアンスで語り、梅棹忠夫的な棲み分け理論をも漂わせるが、他方で、アイデア的な「過去も未来もない永遠の自然」という語りで、自然農法はアイデアとしての自然の力を最も良く発揮できる組み合わせを発見することであるという意味合いで説明することもある。実際、「自然」農法といいながら、自然には生成してこなかった組み合わせを、つまり米と麦とクローバーの組み合わせを見つけ出し、不耕起二毛作でかなりの収穫を挙げたことを、福岡は自らが考える自然農法の実証と見なしている。

また、福岡の自然農法の説明を注意深く読むと、鶏糞を播く、土団子を作る、という表現があるのに気付く。鶏の糞を用いるというのは有機農法に近い。それゆえ、人為をまったく排除しているわけではない。また、土団子を作るというのは、人間の手を加えていることである、何かを為しているといえる。それゆえ、自然農法は人為を排するというが、人の手が少しも介在しない、ということではない。この点について、福岡は次のように説明している。「冬のネズミな

どの害を防ぐため、籾種に塗布する長期保護剤（合成樹脂に農薬混合）を開発し、越年稲を作ることにより成功したのは十数年もあとのことであった。さらにその保護剤を無用にすることを考えて、ようやく現在のような土団子播きをして自然農法が確立されたのである。」（福岡 2009b:254）つまり、「自然」農法とは、必ずしも自然の害（この場合はネズミ）をそのまま放置するということではなく、麦・米などが潜在的に持ち力を最大限に引き出す配慮をするというでもある。土団子は、後に砂漠化を止める運動に関わった時にも大いに活用されたが、その際でも、たとえば、飛行機から土団子をまき散らす、といったアイデアも出したりしたことから、「自然農法」の基本的な完成型が出来上がってからはかなり柔軟な立場も模索するようになったといえる。

V. 自然農法からの現代農業批判

さて、福岡の基本的立場が分かると、福岡が為す現代農業批判、現代文明批判、そして西洋思想批判も、表現の仕方は微妙に変わってくるが、ある程度一貫性を持っていることが明らかになる。ここでは紙面に余裕がないので、現代農業についての福岡の見解だけを取り上げることしたい。福岡の現代農業批判は年齢が進むに従ってそのトーンが変わってきている。それゆえ、いつの時点で書かれたものか、ということについても踏まえておく必要がある。まだ相対的に若い頃に書かれた現代文明批判、西洋思想批判にはかなり難解な言い方もしているが、成熟し、世界的にその業績が認知されるようになってきて、現在進行形の文明批評を展開しようとする時、基本的な視点は変わらないが、言い方には直接的な言い方も散見されるようになってくる。

福岡の『わら一本の革命』が英訳され、海外で広く読まれるようになり、海外から若者たちが福岡のもとを訪れるようになる。海外での評価が高くなるについて、福岡の活動や視点もグローバルなものになっていき、1988年にはマグサイサイ賞を受賞する。そのように福岡の活動が日本国内で自然農法を確立するために試行錯誤し、実証するという段階から、アメリカ、ヨーロッパの視察・講演旅行をし、現代グローバル世界における農業や農地の問題に関わっていくようになった頃に書かれたいわゆる文明批評の文書がある。そして、キリスト教社会においても自らの自然農法が評価されるようになったこととも関係があるかもしれないが、先に取り上げた「無」の経験も次のように言い直される。

「私は若い時、ある日、突然、“神の全貌を観た”のです。」（福岡 1984:i）

という風に大きく変わることになる。このように福岡の意識の中で「無」から「神」への変遷も起きたといえる。福岡の「神」の語り口にはキリスト教的な語りが伺うことができるが、福岡のいう「神」はキリスト教的な人格神ではない。むしろ近代日本人が日本語における「神」を通して観た「自然」即「神」という近代的な日本文化を背景にした神であるといっても良い。興味深いことに、以前には色濃く散見された仏教的なニュアンスからの批評は影を薄め、自身の自然農

法を通した現代社会批評が観られる。

福岡の現代農業について対する強い批判意識は、彼が抱いていた危機感の裏返しでもあった。まず、福岡は現代日本社会において農村・農民が絶望的事態に陥ってしまっている現代農業の歴史の過程を、福岡なりの観点から纏めている。福岡が現代農業の批判をする時にはかなり辛辣な言葉を用いている。福岡が考える歴史の過程がそのまま「事実」としての歴史といえるかどうかは検討しなくてはならないが、ここでは福岡がどのように考えていたかが重要であるので、できるだけ福岡の観点を観てみることにしたい。

かつて農民は貧しくうがが上がらなかったと言われるが、果たしてそうであったのであろうかと、福岡は自らに問いかける。世間から離れ、ひっそりと暮らしていた農民は不安もなく平穏な日々を送っていた。それは、自らが大自然の一員であり、大自然（あるいは神）の側近として神の園を耕す喜びと誇りの日々があったからである。

だが、第二次世界大戦後の日本社会では農村は疲弊することとなっていく。

「もう一度この間の農法の変遷の跡をみてみよう。牛耕が機械による耕耘に変わり、自然の有機物肥料に代わり化学肥料が使われだしたことは、単に農法の省略可の第一歩にみえるが、これは従来の自然のなかでの自然の力による農法から、百姓が自然の手から離れ、人知・人による農法へ転換したという意味で重大な出来事であった。」（福岡 1984:219）

この人知・人知の一部として福岡が問題視しているのは、近代の農学者であり、石油加工業者であり、農機会社である。農村に動力のついた運搬車トラクターが導入されたときから、日本の農業は大きく変貌した。⁸機械化の導入は省力化という美名のもと進められた。牛耕は耕耘機によって代われ、更には大型のトラクターも導入された。除草剤、農薬の散布方法も動力噴霧機を使ったものから遠隔操作のできる小型ヘリによる散布へと新たな方法が導入されていった。このような流れにともない従来の有畜農業は敬遠されるようになり、化学肥料、農薬多投の農法へと移行していった。福岡によれば、このような農業の変化の背後で、機械工業と重化学工業の復興も進んでいた。すなわち農業の「近代化」は第二次世界大戦の敗戦によって壊滅した兵器産業や工業界が変身して生き延びる機会となったものであり、日本の産業社会の復興にも繋がっていったのだという。だが、それはまた、農民が「工業生産業者の下請け食品生産業者」に転落する道でもあった。

このように、農業の工業化によって引き起こされた農民の立場の変化と農法の変化は作物の質的変化ももたらすこととなったと、福岡は見る。以前はたとえ人糞・金肥を用いていたとしても青空の下で自然に生育した作物であった。だが、農民が農機を用い、化学肥料を多投し、農薬を散布するようになると、農民が作る作物は「一種の石油合成食品」になってしまった。昔の米は

8 福岡は、農機会社社長の「農業に運搬ということを見付けたり」という言葉が戦後の農民に衝撃を与えた言葉の一つであると挙げている。残念ながら、どの農機会社かは不明である。

水田で作られたが、今や米は油田の米といわれるほど油による肥料と油を用いた耕耘機などによる米作になってしまっている。米作の質的革命が引き起こされたのである。かつて生命の糧を作り神の側近といわれた農民が、今や虚構の栄養食品を作る下請け商人となり、同時に、油売りの商人にもなってしまった。

このように化学肥料や農薬、そして動力機械を利用することにより、農業は膨大なエネルギーを消費する産業となった。そして、近代農業は効率化を目指したはずが、一人当たりの労働生産性が向上したと思ったとき、農機による耕耘、化学肥料の多用、農薬多投のため土地の生産性は低下し、エネルギー収益性は通減していった。第二次世界大戦時、水田に投下されたエネルギーに対して4倍のエネルギーが収穫されたが、10年後に小型農機が導入された頃には半減し、更にその10年後にはエネルギー収益がゼロとなってしまう。現代農業はエネルギー消費産業になってしまっている、というのである。

福岡がこのような批判をする背景には、当然ながら、人為無用、エネルギー投下ほとんどゼロの自然農法を実践し、成果を挙げてきたからに他ならない。福岡がこのような批判をするのは、同時に、近代農業に束縛されてしまった農民が果たしてかつての農民が感じたような幸福感を感じられるのかという同情心もあったかと思われる。福岡の現代農業批判には聞かすべき点もあると思われる。

VI. 結び

福岡正信は自身の自然農法を形だけ真似ても無駄であると繰り返し述べている。その土台となっている思想、「無」の哲学が理解され、受け入れられなくては自然農法とはいえないと考えている。このような立場は、福岡の若かりし頃の「一生を狂わせる一事」が出发点となり、それを実証するために試行錯誤することによって実現したのが自然農法であるという福岡自身の理解があるからといえる。福岡のこのような人生経験を理解することなくしてはその自然農法も十分には分らない。また、福岡は自然農法が少しずつ広まることにより社会が変革していくことも期待していたが、福岡の経験は誰しもが共有できるものではなかった。福岡自身が自らの立場をしばしば悟りに近いものとして捉え、そのように提示する時、そして、その語り口が必ずしも一貫性をもって語られる形式でないため難解であるという印象を与える時、おそらく福岡自身が自然農法の思想を聞こうとする人々にハードルを上げてしまったのかもしれない。だが、福岡の基本的立場、「何もなかった、何もしなかった」、人間が作り出すものには何も価値はないということの意味が一旦分かれば、福岡が難しそうに述べていることは極めて簡潔であるともいえる。

世界の総人口が70億人を越え、世界のエネルギー事情が悪化し、水戦争の世紀ともいわれる21世紀に入って10年近くが過ぎた。福岡の自然農法は土地改良から始めて10年近くは時間がかかる。日本で育まれた福岡の自然農法が日本のみならず世界の食糧事情を救う手段になるにはかなり長期的な取り組みが必要であろう。自然農法がレスター・ブラウンの『プランB』の重要な一翼を担える可能性があるのではないかと思いつつも、自然農法の思想にはその難解さゆえに、容易

に入ることはできないのではないかと懸念される。だが、福岡の思想に触発され、小規模ではあるが自然農法を実践している若者も増えてきている。このような人たちが農業に従事しているという事実がおそらく自然農法の未来に希望を与えているのであろう。

引用文献リスト

- 来米速水編著.1983.『日本の自然農法』弘生書林。
 ——編著.1984.『世界の自然農法』弘生書林。
 シヴァ、ヴァンダナン.1997.『緑の革命とその暴力』浜谷喜美子訳 日本経済評論社。
 廣重徹.2008.『近代科学再考』、筑摩書房。
 ビッケル、レナード.1975.『飢餓への挑戦：ノーマン・ボーローグと緑の革命』、仙名紀訳、TBS出版会。
 福岡正信.1976.『自然農法 緑の哲学の理論と実践』時事通信社。
 ——.1984.『自然に還える』春秋社。
 ——.2010.『無[Ⅰ] 神の革命』春秋社、新版。
 ——.2009a.『無[Ⅱ] 無の哲学』春秋社、新版。
 ——.2009b.『無[Ⅲ] 自然農法』春秋社、新版。
 藤井平司.1983.『甦れ！天然農法 暮らしの思想をたどる』新泉社。
 モリソン、ビル、レニー・ミア・スレイ.1993.『パーマカルチャー：農的暮らしの永久デザイン』田口恒夫、小祝慶子訳 農山漁村文化協会。
 モントゴメリー、ディビッド.2010.『土の文明史』片岡夏実訳、築地書館。
 James, William, *The Variety of Religious Experience* (New York: Penguin Group, 1982).
 Proudfoot, Wayne, *Religious Experience* (Berkeley: University of California Press, 1987).

